

## 大草城

南北朝時代(1336~1392 年)になると、大河原が信濃における南朝方(宮方)の拠点となるが、当然西の玄関口である小渋の谷の入口を固める必要があった。そこで、香坂高宗か同族の者が大草城を築いたと思われる。この時代の大草郷の地頭は大草氏で、香坂氏との関係はまだそれほど強いものではなかった。

香坂高宗は 1390 年頃、大河原城から大草城へ移っている。その頃、香坂氏は大草氏と血縁関係になったと云われている。1507 年、香坂宗縁(大草庄三郎/入道休斉)の頃、香坂・大草は一つに纏まったと見られている。

御北(沖田)には支城があり、大草休斉が引退すると御北を隠居城として使用していたのだろう。天正 19 年(1591)の大草郷検地帳には城跡は畑となっているとある。その後、長いこと畑もしくは更地になっていたと思われるが、飯島日曾利の高坂家が当地に移住してきたと推察する。

『史跡名勝めぐり大草城址 大草にある。西は深沢川に臨み南北は深く切れて溪谷となり東方は二条の堀切りで遮断されている。本丸は三十間四方、その南に帯郭があり、北方に一段低く二の丸がある。小城ではあるが要害の地で、築城年代や築城者はわからないが城の形式は南北朝時代のものといわれている。大草は南北朝時代には特に大河原の南朝方と関係の深かった所であるから、香坂氏の拠った城で、以後その子孫高坂氏の城地だったと伝えられている。』

「なかがわ」(中川村公民館報 第 5 号、1960.2.15)

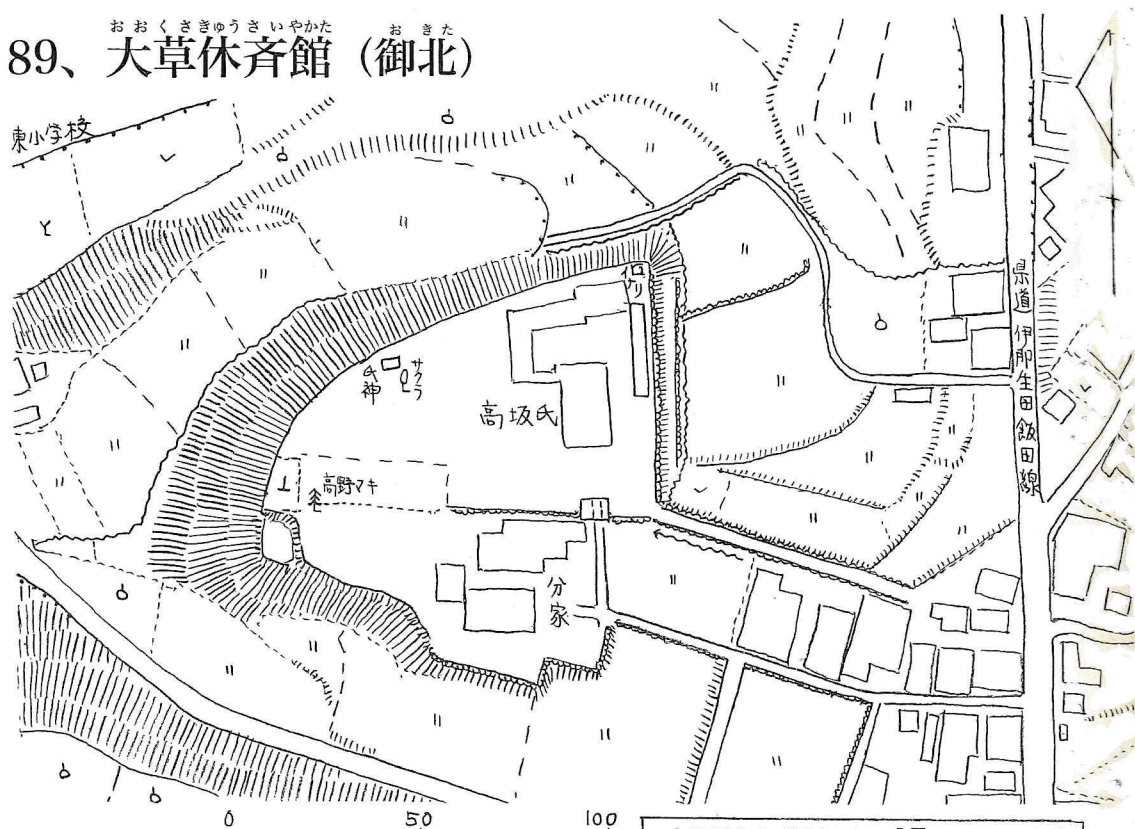
大草城は河岸段丘が半島状に天竜川方向へ突き出した先端部を利用して築かれている。また、大草城からの眺望はよく天竜川と伊那谷を一望することができるが、この点は日曾利の香坂家屋敷と非常に類似している。天竜川の直ぐ東側の高い場所にあり西側を天竜川が蛇行して流れ、川の反対側を一望できるという点である。大河原城の支城として大草城、出先の屋敷として日曾利の屋敷が重要な役割を果たしたのだろう。

つまり、大河原城、大草城、日曾利の屋敷は香坂家にとって、北朝方と対峙する上で重要な軍事拠点であったと思われる。

残念なことに、大草城跡は徹底的に破壊し尽くされてしまった。研究者から、「低レベルの公園化」とか「保護意識の低さ」と批判されている。

(川端紅葉著 2026・3・13)

おおくさきゅうさいやかた おきた  
89、大草休斉館（御北）



○立地 大嶺山(1020.2m)の西麓大草の丘陵地帯に立地。大草城の北側300mにあることから「御北」(沖田)と呼ばれる。高台にあるために眺望はよく効き、小波川流域を通して鹿嶋地区の玄关口に当り、四徳を経て、駒ヶ根中沢地区へ通じる交通の要衝である。

中川村大草沖田 13・16 頁  
平成14年4月15日調・同16日作図  
標高597.2m、比高15m

この台地は舌状に突き出ているために、東南の一部が奥の丘陵地に続くだけで、東、北、西、南の四周は低湿地に囲まれ、要害堅固な地形である。現在高坂氏の宅地となっている。

○館主大草氏 上伊那の南端部の南向(みなかた)には中世以来の古い武家被官制の名残りである「御館」が残っている。この大草休斉館跡と言われる「御北」もその一つで、館主は大草氏(香坂氏)である。

大河原に在って南朝方として宗良親王を援けて活躍した香坂高宗は、伊那からの玄关口に当る大草即ち一族や配下を配置したものと考えられている。『伊那の古城』しかし、記録や伝承もなくはっきりしたことは分らないが、天正10年(1582)7月に、下伊那の下条頼安(安事介)が伊那衆の忠誠を家康に誓った起請文を取りまとめて提出した中(徳林寺蔵)に、大草休斉(香坂氏)は連名でなく一人で一枚書いていることから相当の勢力があったようである。南北朝期以来この地に大草氏は勢力を保っていたらしい。

遠州秋葉社に納めた大草休斉家中衆の連名起請文には、片桐、北林、上沼、湯沢、新居、大沢、橋渡、松平、南島、茶山、宮下の諸氏の名がある。

香坂氏は、代官として大草一帯を支配したが天正末期に帰農したらしい。

館跡は旧態をよく残っていて、北東の隅に輪荷社をまつり、大手は県道より南東隅、分家の門前に至る。門の東の直線の石垣は、水路のためのものであるのか。

大草城の築廃、高坂への改名等不明の点が多く残る。

主屋は平成8年に改築。

